

韓国大学生訪日団（第1団）招へい事業の記録

1. プログラム概要

【目的・概要】日韓関係の改善を基盤とした訪日プログラムの一環として、韓国全土から選抜された大学生等 35 名が、7 月 1 日～7 月 7 日まで、今後の日韓間の相互理解と信頼関係増進の基盤強化に寄与することを主目的として訪日しました。一行はテーマ「東日本大震災から 15 年、被災地視察と日本の防災」の下、東京都、神奈川県、宮城県、岩手県を訪問し、各種視察、日本の大学生との交流、テーマに沿った講義聴講等を通じて、日本に対する理解を深めるとともに、プログラム中の学びや訪問地の魅力について SNS 等で発信しました。

【参加者】韓国の大学生等 合計 35 名

【訪問地】訪日（東京都 35 名、神奈川県 35 名、宮城県 35 名、岩手県 35 名）

【日程】

■ プレプログラム（オンライン事前学習）：

2026 年 6 月 19 日（金） オリエンテーション（プログラム説明）、参加者による対外発信

■ 招へいプログラム：

2026 年 7 月 1 日（水） 成田国際空港から入国、オリエンテーション

【視察】李秀賢氏追悼・顕彰碑含む新大久保フィールドワーク

2026 年 7 月 2 日（木） 【学校訪問・交流】フェリス女学院大学

2026 年 7 月 3 日（金） 宮城県へ移動、【視察】女川地域の復興：防潮堤の無い街づくり

【視察】震災遺構：石巻市立大川小学校

2026 年 7 月 4 日（土） 【視察】南三陸地域の復興：かさ上げ復興の事例、
震災遺構：旧防災対策庁舎ほか、【視察】震災遺構：奇跡の一本松

【視察】震災遺構：旧陸前高田市立気仙中学校

【視察】東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル

【交流】ホームステイ対面式

2026 年 7 月 5 日（日） 終日ホームステイ

2026 年 7 月 6 日（月） ホームステイ解散式、【講義・視察・交流】石巻専修大学の学生との共同授業（石巻市内復興状況の講義、日韓混合グループで実際のまちづくりの状況フィールドワーク及び復興案についてディスカッション及びその成果を石巻市役所へ提言として提出）、成果報告会

2026 年 7 月 7 日（火） 仙台空港から出国

2. 記録写真

	
2026 年 7 月 2 日【学校訪問・交流】フェリス女学院大学	2026 年 7 月 3 日【視察】女川地域の復興の様子
	
2026 年 7 月 3 日【視察】震災遺構：石巻市立大川小学校	2026 年 7 月 4 日【視察】震災遺構：旧陸前高田市立気仙中学校
	
2026 年 7 月 4 日【視察】東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル	2026 年 7 月 5 日【交流】ホームステイ
	
2026 年 7 月 6 日【講義・視察・交流】石巻専修大学の学生との共同授業	2026 年 7 月 6 日 成果報告会

3. 参加者の感想（抜粋）

◆ 韓国 大学生

石巻市立大川小学校の視察を通して、この悲劇の原因は事前の防災体制や具体的な避難計画が十分に整備されていなかったことにあったことを知りました。また、子どもを亡くされたご遺族でありご自身も教師でありながら、当時の先生方を責めることなく、広い心で受け止めておられる案内の方の姿に深い尊敬の念を抱きました。この震災を単なる悲しみとして終わらせるのではなく、学校に刻まれた「未来をひらく」という教訓のように、未来へつながる社会的な価値へと昇華させていかなければならないという話に大変感銘を受けました。幼い頃に起きたため詳しく知る機会のなかった東日本大震災の悲惨な実情を目の当たりにし、津波避難教育の重要性を改めて強く実感しました。

◆ 韓国 大学生

被災地を実際に訪れ、災害は時間が経っても地域や人々に長く影響を及ぼし続けるものだと実感しました。また、災害の記憶や被害の痕跡を保存し、後世へ教訓を伝えようとする取り組みがとても印象に残りました。特に防災の重要性を改めて強く感じました。「ハッピーエンドのために、みんなが生き残って喜びを感じるために」という言葉から、防災と備えの大切さをより一層実感しました。

◆ 韓国 大学生

ホームステイ先のご家族はとても親切に迎えてくれましたが、私が日本語を話せなかったため、あまり会話ができなかったことが心残りでした。韓国で日本のコンテンツに触れるときは、字幕が付いているので日本語を勉強したいという気持ちはそれほど強くありませんでした。しかし、ホームステイを通して日本の方々と身近に接する中で、日本語を学び、これからはもっと多くの日本の方々と交流したいと思うようになりました。

4. 受入れ側の感想（抜粋）

◆ 学校訪問先 学生

交流会に参加して、韓国の文化や社会に関する新たな知識を得ることができました。特にグループディスカッションで日韓の就職活動に関する情報を共有できたことは、現在就職活動を進めている私自身にとって非常に意味のある時間となりました。異文化理解をする上で、ネット上だけの情報を見るだけでなく実際にその国の大学生と意見を交わすことが非常に重要であることを学びました。

◆ 学校訪問先 学生

同世代の韓国人と交流する機会はいまだにあまりなかったため、とても貴重な経験となりました。さらに、現在の日本と韓国の違いや共通点について実際に話し合うことができ、お互いの文化や考え方への理解を深める良い機会になったと思います。

◆ ホストファミリー

とてもまじめで積極的なみなさんでした。日本語を専攻している方もいて日常会話が日本語でできたことにびっくりしました。日本にとっても好感を持ってくれていて、私たちも韓国が好きになり、行ってみ

たいと思いました。

5. 参加者の対外発信（抜粋）、報道記事等

 2026年7月1日（Naver Blog：李秀賢氏追悼・顕彰碑含む新大久保フィールドワーク） イ・スヒョンさんは2001年1月26日に新大久保駅で線路に転落した日本人を助けようとして飛び込み、尊い命を落としました。当時はまだホームドアが設置されておらず、そのことが事故につながりました。外国人でありながら、自らの命を顧みず人を助けようとした勇気ある行動は、日本社会に大きな感動を与え、その後ホームドアの設置が各駅で進められるきっかけの一つにもなりました。私は5年前、『イ・スヒョン、1月の陽だまり』という本を読んでこの出来事を知りました。スポーツと音楽を愛し、日本と韓国をつなぐ架け橋になりたいという夢を持っていたそうです。そのことを改めて思い返しながら、追悼碑の前に立ち、胸がいっぱいになりました。	 2026年7月2日（Naver Blog：大学訪問） グループ討論と発表を行ったとき話題になったことは、韓国と日本の部活動の違いでした。韓国では受験や内申書を充実させるために部活動をする人が多いですが、日本では自分の興味や好きなことに合わせて部活動を選ぶ人が多いという話がとても印象的でした。まさに「青春」という感じがして、すごく素敵だなと思いました。韓国でも受験のためだけではなく、心から楽しめる部活動がもっと増えたらいいなと思いました。
 2026年7月3日（Instagram：震災遺構：大川小学校）	 2026年7月4日（Instagram：震災遺構：気仙中学校）

3. 11 大地震と津波で学校がどのようなになったのか
知ることができました。子どもを亡くしたお父さ
んが話をしてくれましたが、当時の状況を詳しく
説明してくれたため、より心が痛みました。避難/
防災意識の重要性と記憶を未来に伝える重要な場
所であり印象深かったです。

学校全体が津波に巻き込まれるほどの高い波がきたことが信じられませんでした。卒業式を目前にした学生がこのような災害を経験することとなり、とてもやるせない気持ちとなりました。幸いにもこの学校の生徒は高台に避難して被害はありませんでしたが、町が津波にのみ込まれる姿を見てどれほどつらかったろうかと考える時間となりました。

6. 報告会での訪日成果とアクション・プラン発表（概要または抜粋を記載する）

【成果の発表】

帰国前の報告会で、参加者から成果として次のような発表がありました（抜粋）。

・東日本大震災関連視察の中で最も印象に残ったのは女川町の事例でした。それまで津波防災とは高い防潮堤を築いて津波を防ぐことだと考えていました。しかし、防潮堤の高さを上げるのではなく、海が見えるまちづくりを進めた女川町の取り組みは、私の視野を大きく広げました。特に印象的だったのは、既成世代が30～40代の若い世代に町の復興を託した「女川町」の精神と姿勢です。さらに、津波防災教育の重要性を重視し、その経験や教訓を次世代へ語り継ぐ「語り部」を育成している点は、日本ならではの取り組みであり、韓国の防災システムとの違いを強く感じました。

・地震被害や防災に関する話を伺う中で、以前の私は「地震によって多くの悲しい出来事が起こった」という程度の認識しか持っていなかったことに気づきました。しかし、実際に被災された方々の話を直接聞き、ただ悲しみにとどまるのではなく、未来や次の世代のために前向きに歩み続けようとする姿勢に深く感銘を受けました。

・震災の事実を伝え続け、何が問題で何が有効だったのかを分析・研究し、将来の被害を少しでも減らそうと努力していること、そして被災地復興に尽力している人々の姿は非常に印象的でした。

【アクション・プランの内容】

参加者の主なアクション・プラン（帰国後 3 か月以内に実施予定）の内容をまとめると次の通りとなります（抜粋）。

・「韓国（慶州）と日本における地震防災への意識」をテーマに交流大学の学生やホームステイのホストと対話を続け、その内容を SNS で短い記録として発信していき、実用的な防災情報や安全対策を共有しながら、日韓の若者同士が継続的に防災について意見交換できる場へと発展させていきます。

・地震被害や防災に関する内容をより多くの人に伝えるためにブログを執筆します。現地で直接伺った被災者の体験談や自分自身が感じたことをもとに、当時の状況や復興の過程、防災の重要性について整理して発信します。これにより、多くの人が地震災害をより現実的に理解し、将来の被害を最小化するために役立つ情報を共有したいです。

・東日本大震災や津波被害を受けた地域を実際に訪れ、現地の様子や当時の被害状況、復興の歩みを伝える YouTube ショートや Instagram リールを制作し、情報発信に取り組みます。震災の教訓や防災の重要性に加え、地域の復興や文化、観光資源にも目を向けることで、被災地が歩んできた歴史や現在の魅力を発信していきたいです。

・今回の日程では時間の関係で行くことができなかった震災遺構もルートに入れつつ、1～2日で回ることができ、且つ、震災関連の学びもある観光コースを作って SNS で発信します。

《実施団体による評価》これらのアクション・プランにより、下記の成果が上がることを期待。

1. 団員たちによる、日本の大学生やホームステイ先家族と対話の継続ならびに SNS 上での「地震防災」についての意見交換の場の運営は、日韓の若者たちが両国に共通する「自然災害」という課題について、互いの状況や対応を学び合い、対策を共有する貴重な機会となる。両国の事業関係者の間で、喫緊の共通課題についての相互理解が深化。
2. アクション・プランからは、団員たちが、今回の訪日をきっかけに日本の震災対策及び防災に強い関心を持つに至ったことが読み取れる。震災地への再訪やこれを通じた新たな対外情報発信等も計画されているところ、これらの関連情報の発信は、世界でも最先端にある日本の震災対策・防災技術への関心を、今回の団員のみならず、韓国の一般の人々からも呼び起こし、日韓関係の重要性についての再認識を促進。
3. 被災地について、震災の被害だけでなくその後の復興の歩みや観光資源等、現在の各地域の魅力についても発信が予定されている。これらは、韓国内において東日本大震災被災地に対する関心を高め、特に東北地方の水産物に対するイメージ等、風評被害の払拭につながり、ひいてはインバウンド誘致にも効果をもたらすであろう。

以上

実施団体名：公益財団法人日韓文化交流基金